甘粛省と酒泉オアシスの変容

甘粛省与酒泉緑洲的変容

石原　潤・石　培基・秋山元秀・小島泰雄編

奈良大学文学部地理学科

目 次

序言

石原 潤（奈良大学） …………………… 1

オアシス都市の変貌 －酒泉市粛州区の住宅都市化－

秋山 元秀（滋賀大学） ………………… 3

酒泉市街地及び周辺農村における卸・小売市場

石原 潤（奈良大学） …………………… 18

酒泉オアシスにおける都市と農村

小島 泰雄（神戸市外国語大学） ……… 33

酒泉市粛州区におけるタマネギ生産の展開

高橋 健太郎（駒澤大学） ……………… 45

新農村建設と農村空間に関する予備的考察 －酒泉市粛州区の事例から－

小野寺 淳（横浜市立大学） …………… 60

酒泉・敦煌の観光開発をめぐる現状と課題

松村 嘉久（阪南大学） ………………… 74

甘肃省城镇化地域差异研究

杨 中标（西北师范大学） ……………… 89

甘肃省城乡协调发展研究

马 晟坤（西北师范大学） ……………… 99

甘肃省农业和农村经济发展探讨

齐 志男（西北师范大学） ……………… 105

甘肃省国际旅游客源市场时空变动分析

李 先锋（西北师范大学） ……………… 113

酒泉市城镇体系空间结构及其分形研究

刘 海龙（西北师范大学） ……………… 119

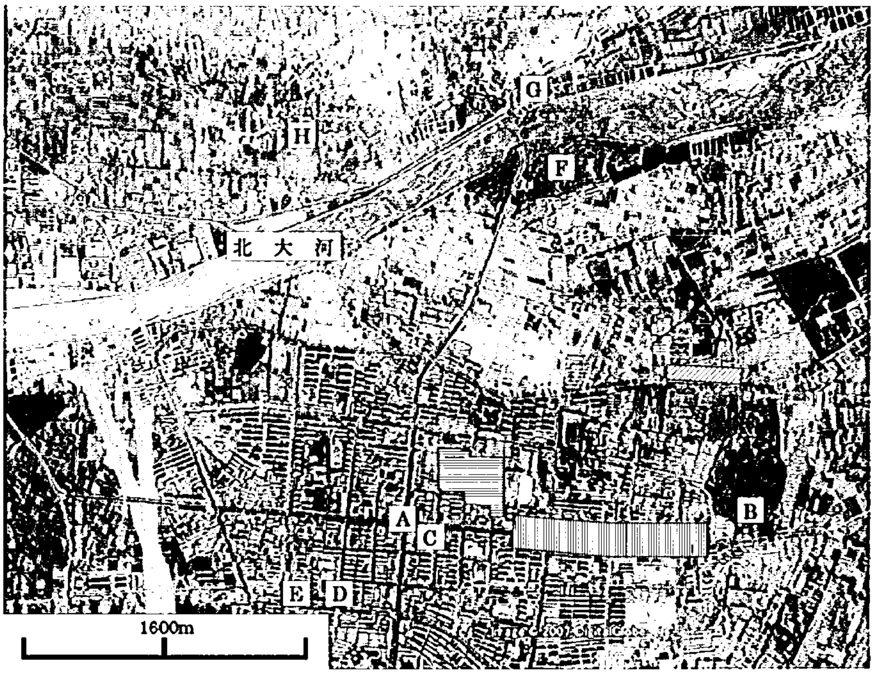
陇南市成县店村镇张寨村社会主义新农村建设初探

李 快满（西北师范大学） ……………… 126

石羊河流域生态环境建设与水资源可持续利用战略对策研究

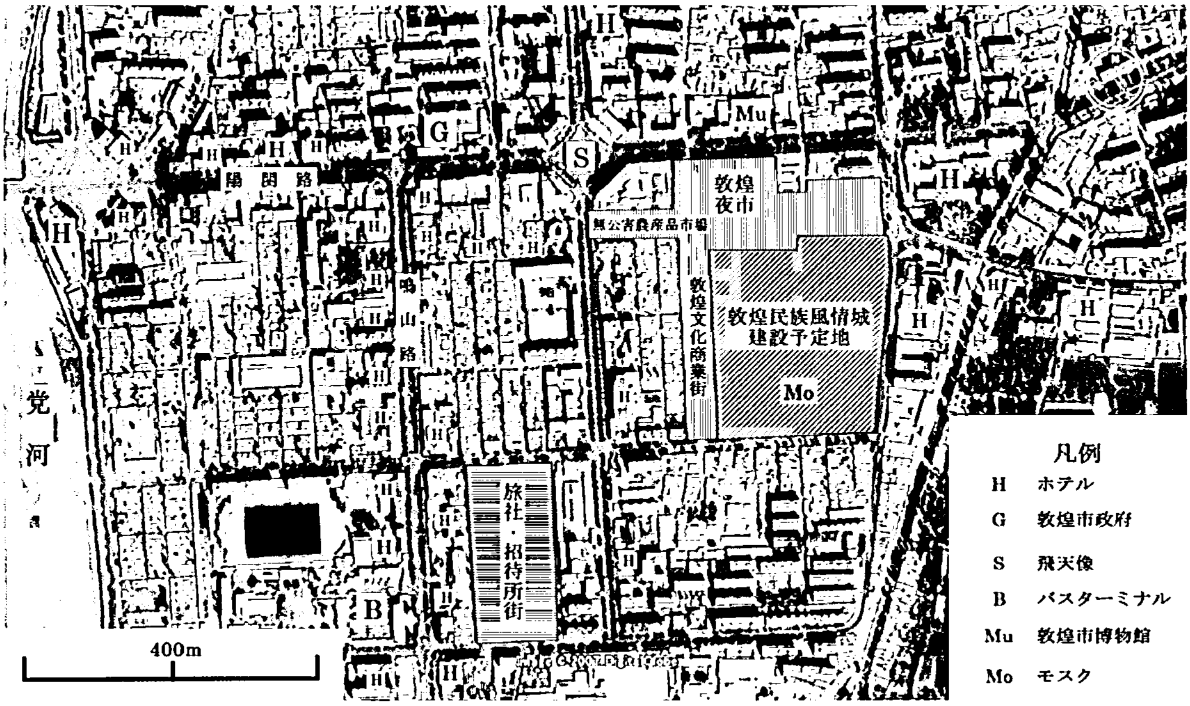
石 培基（西北师范大学） ……………… 133

松村喜久「酒泉・敦煌の観光をめぐる現状と課題」より



第３図　粛州区市街地の観光スポットの分布

注）Google Earth で検索した画像を原図として筆者が作成した。



第５図　敦煌区市街地の観光をめぐる現状

注）Google Earth で検索した画像を原図として筆者が作成した。

序　言

石原　潤（奈良大学）

本書は日中共同研究「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」の、第２冊目の調査報告書である。

本研究の目的は、1978 年以降の改革開放政策下において、とりわけ近年の西部開発の進展の下にあって、中国西北部の都市及び農村がどのような発展をとげ、それが住民の生産・消費の諸活動にどのような変化をもたらし、彼らの生活空間がどのように変わったかを明らかにすることにある。

近年の中国は著しい経済発展を成し遂げているが、それは「東部」沿海部を中心としたものであり、最内陸部のいわゆる「西部」は発展から取り残され勝ちで、両者の間に著しい地域格差が生じている。このため中国政府は、この較差を是正すべく、「西部大開発」を最重点戦略の一つと見なしているのである。

本研究の日本側グループは、従前、「西部」の中でも湿潤気候に属する「西南部」の四川省について、その変容の実態を３冊の報告書によって明らかにした。これを踏まえて同グループは、次の課題として、「西部」の中でも乾燥気候下に属する「西北部」に対象地域を移して、その変貌の実状を明らかにしようと考えている。「西北部」の入り口にあたる西安市と乾燥した黄土高原の村を取り扱った第１回の報告に続いて、今回の報告は、第２回目として、「西北部」の典型的な地域である甘粛省の全域と、特にその内の酒泉オアシスとを採り上げている。甘粛省は、黄河上流域の乾燥した平地と山地を含み、また旧シルクロードの一部をなす河西回廊のいくつかのオアシスを含んでいる。酒泉オアシスは後者の一つで、しかも敦煌や新彊に最も近い、いわば辺境のオアシスである。

本報告書を一読された読者は、市場経済化の波や西部大開発の影響が、甘粛省の都市や農村、辺境のオアシスの町や村々をも、大きく変容させつつあることを理解されよう。本報告書が、西部大開発を進めようとしている中国の政策担当者、あるいはそれを理解ないし援助しようとしている日本の関係者に、いくばくかの情報提供の役割をはたし得たならば、われわれの望外の喜びとするところである。

本書のための現地調査は、2006 年８月 26　日から９月９日の間、以下のメンバーによって実施された。

日本側メンバー

石原　潤　奈良大学文学部
秋山元秀　滋賀大学教育学部
小島泰雄　神戸市外国語大学外国学研究所
小野寺淳　横浜市立大学国際文化学部
松村嘉久　阪南大学国際コミュニケーション学部

髙橋健太郎　駒沢大学文学部
中国側メンバー
石　培基　西北師範大学地理与環境科学学院
李　先鋒　西北師範大学地理与環境科学学院・西北第二民族学院管理学院旅游系
馬　晟坤　西北師範大学地理与環境科学学院
揚　中標　西北師範大学地理与環境科学学院
李　快満　西北師範大学地理与環境科学学院
劉　海龍　西北師範大学地理与環境科学学院
斉　志男　西北師範大学地理与環境科学学院

本書は、以上のメンバーの共同調査に基づき、資料の一部を共有しながらも、各自がテーマを分担して、分析・考察・執筆を行った諸論文からなっている。

本共同研究は、財政的には、日本学術振興会の2006年度科学研究費基盤研究（A）「中国西北地方の改革開放および西部開発の進展に伴う生活空間の変容」（課題番号：17251010、研究代表者：石原　潤）によって全面的に支えられたものである。記して感謝の意を表したい。　調査にあたっては、西北師範大学の石　培基教授が全般的な準備の労を取って下さり、酒泉の現地では、碩士課程の学生であった6名の方々が、日本側の6名に対して多大の援助を与えて下さった。これらの人々に対して、深甚の謝意を表したい。日中関係が微妙な時期であったため、調査には困難が伴ったが、一応の成果を挙げることが出来たのは幸いであった。

酒泉・敦煌の観光をめぐる現状と課題

松村嘉久（阪南大学国際コミュニケーション学部）

1．はじめに

現代中国の観光は，観光と言う娯楽性の強い消費行動が否定された毛沢東時代を経て，とりわけ90年代半ばから国内観光を中央政府が奨励するようになって，急速な成長を遂げてきた。ユネスコ世界遺産が国内外の観光客を呼び込む事実上のブランド商品になって久しいが，甘粛省には87年に世界文化遺産登録された敦煌の莫高窟があり，嘉峪関も同年に万里の長城を構成する一部分として世界文化遺産に登録されている。甘粛省には十六国から南北朝時代にかけての石窟が多く，莫高窟がその代表格である。天水の麦積山石窟，武威の天梯山石窟なども有名である。甘粛省内には万里の長城の遺跡や遺構も多く，秦代長城が200km弱，漢代長城は600kmほど現存するといわれている。この他に，歴史文化名城という観光資源も，中国の主に国内観光を促進するブランド商品となった。甘粛省では，敦煌・武威・張掖・天水の四都市が国家レベルのそれに，酒泉市・臨夏市・夏河県・会寧県・慶陽県・霊台県・隴西県の七都市が省レベルのそれに指定されている。甘粛省の観光資源は意外と豊かである。

近年の甘粛省の観光関連の統計を確認しておこう。甘粛省に来る観光客は03年にSARSの影響で落ち込むものの，基本的には90年代以降，順調な右肩上がりの成長を遂げつつある。05年，甘粛省には1,236.7万人回の観光客（06年1,604.4万人回）が訪れ，観光総収入は62.6億元（06年80.2億元）であった。観光客の内訳は，国内観光客が1,207.9万人回（06年1,574.1万人回），国際観光客が28.8万人回（06年30.3万人）で観光外貨収入は5,876.3万US$（06年6,292.6万US$）であった。近年国内観光客の増加率が国際観光客のそれよりも高い傾向が伺える。香港・マカオなど中国系同胞の国際観光客を除いた外国人観光客のなかでは，日本人観光客が最も多く，近年では年間3,4万人くらいが甘粛省を訪問している。

雲南省のような観光先進省と比較するならば，甘粛省における観光産業の育成は10年余り出遅れた感が否めない。しかしながら近年，莫高窟や嘉峪関などブランド力のある観光資源を中心として，国内観光ブームと西部開発のもと，甘粛省にも観光関連の投資や資金が流入するようになり，観光関連の政策や規制などが後追い的に急速に整備されつつある。例えば，『甘粛省旅游条例』は06年10月1日付けで発布され，『甘粛省旅游業発展計画（2006－2020）』もようやく審査を通過したところである[1]。06年4月付け発表の『甘粛省人民政府関于進一歩加快旅游発展的意見』によると，2010年までに，国際観光客数46万人回，観光外貨収入1.13億US$，国内観光客数2,300万人回，観光総収入110億元以上にするという数値目標が掲げられている[2]。観光開発に

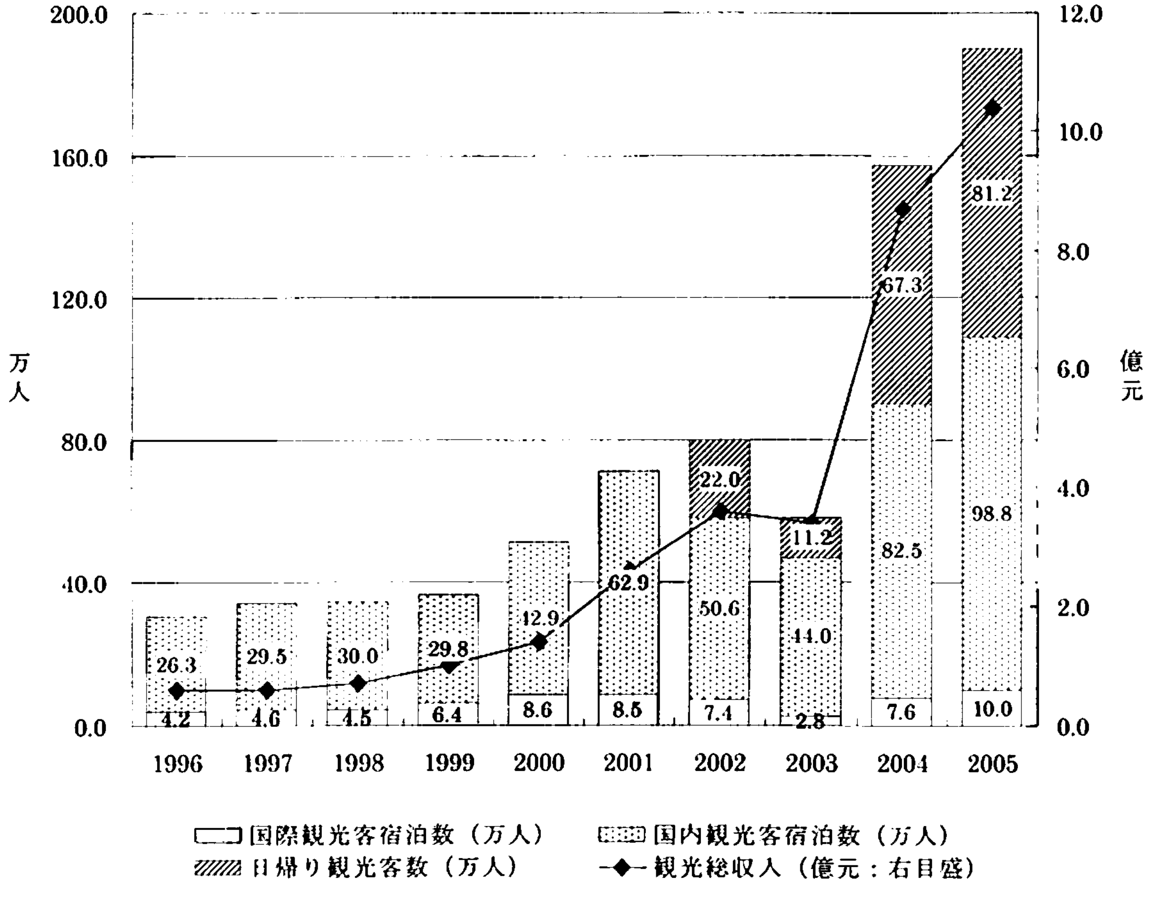
---

[1] 甘粛省の観光関連の法律や統計は，甘粛旅游网（http://www.gsta.gov.cn/tour/index.htm）で検索して確認した。本稿のインターネット情報は全て，07年6月末時点で確認した。

[2] 『毎日甘粛』（http://www.gansudaily.com.cn/）で検索して確認した。

おいては「先に計画して，後で建設する」という原則も示され，「文化甘粛，山水甘粛，民族甘粛，現代甘粛」との多元的な主題を打ち出し，省都・蘭州を観光ゲートウェイにシルクロード黄金観光ルートと黄河風情観光ルートを観光発展の核にしようとしている。

本稿が対象とする酒泉市は，上記のシルクロード黄金観光ルートの拠点となるところである。酒泉市の05年の観光実績は，観光客が190万人回で甘粛省内の地区級行政区のなかでは第三位であった（第1図参照）。しかしながら，国際観光客は10.0万人回で観光外貨収入も2,229万US$を記録し，いずれも省都・蘭州を凌いで甘粛省で第一位を占めた。甘粛省の二つの世界遺産と絡む酒泉観光は，関心が多様な国内観光客はさておき，国際観光客からは絶大な人気を得ている。広大なゴビ砂漠のなかにオアシス都市が点在する河西回廊では，旅客輸送網が質量とも脆弱であり，観光における交通ボトルネック問題に頭を悩ませてきた。近年では西部開発のもと，甘粛省での交通インフラや観光開発に内外からの投資が集まるようになり，観光をめぐる状況は大きく変容しつつある。本稿では，現地調査の成果に基づいて，酒泉市の観光をめぐる現状と課題を述べたい。なお，02年6月に酒泉地区が撤廃され地級酒泉市が新設され，それに伴ってかつての県級の酒泉市は粛州区となった。本稿においては，敦煌市なども含む地級の広域酒泉市を酒泉市と，狭義の酒泉市は粛州区と呼ぶ。



第1図 酒泉市の観光客数と観光総収入の推移

出所）酒泉市旅游局提供の資料『"十一五"及遠景計画旅游指標一覧表』（2005年10月15日付け）より筆者が作成した。

第１表　酒泉市の地区別ホテル数・旅行社数・観光車両数ほか（2005年）

統計指標	粛州区	敦煌市	玉門市	安西県	金塔県	阿克塞県	粛北県	合計
ホテル総数	66	87	18	8	11	3	3	196
客室数	2,527	4,771	615	265	310	107	78	8,673
ベット数	5,137	9,628	1,170	518	678	222	162	17,515
星付きホテル	11	32	3	2	2	0	0	50
客室数	958	2,603	198	76	126	0	0	3,961
ベット数	1,834	5,212	358	158	190	0	0	7,752
その他のホテル	55	55	15	6	9	3	3	146
客室数	1,569	2,168	417	189	184	107	78	4,712
ベット数	3,303	4,416	812	360	488	222	162	9,763
旅行社数	11	49	1	0	1	1	0	63
旅行商品販売単位	30	322	0	4	0	0	4	360
旅行商品生産単位	2	10	0	1	0	2	1	16
観光バス会社	1	3	1	0	0	0	0	5
観光バス台数	45	233	20	0	1	1	0	300
タクシー会社	4	5	0	1	1	0	0	11
タクシー台数	728	1,089	0	175	68	0	0	2,060
観光スポット	9	12	4	4	6	3	6	44

出所）酒泉市旅游局提供の資料『旅游“六要素”統計一覧表』より筆者が作成した。

２．酒泉市の観光事情

（１）酒泉市観光の概観

酒泉市の近年の観光動態を統計でまずは確認しておきたい。第 1 図に示したよう，SARS の影響で中国観光全般が大きく冷え込む 03 年こそ落ち込むものの，酒泉市では観光客総数も観光総収入もほぼ順調に増加している。近年の特徴としては，国際観光客の伸び率が低迷気味であるのに対して，国内観光客が大幅に増加していることが挙げられよう。02 年から国内観光客が宿泊数と日帰り観光客数に分けられているが，国内の日帰り観光客数の伸びも目立つ。後述するよう，酒泉市の地方空港と航空網が近年整備されたことも影響しているであろうが，日帰り観光客数の増加は甘粛省内の域内観光が盛んになったことが最大の要因であろう。

主要な観光インフラ指標を地域別に示した第 1 表からも明らかなよう，多くの指標において，酒泉市の観光インフラの過半は敦煌市が占め，粛州区は域内で第二位に位置している。粛州区観光のゲートウェイは鉄道ならば酒泉駅であるが，飛行機ならば嘉峪関市となる。06 年に 1.1 億元の投資で拡張工事が行われた嘉峪関空港は，輸送能力が大幅にアップした。おおよそ粛州区観光と嘉峪関観光は一体化したものと捉えて良い。国際観光客は更に酒泉・嘉峪関と敦煌をリンクさせて周遊する傾向が強い。毛沢東時代は観光鎖国状態にあったため，現代中国の国際観光の起点は著しく低い。粛州区も 79 年のわずか 364 名の国際観光客という記録から始まり，80 年代は最高を記録した 83 年でも 7 千人余りであった。国内観光客も含めた総観光客数でも 89 年で 4.8

万人と極めて少ない[3]。89 年は天安門事件の影響で中国観光が極端に冷え込むが，その前年の 88 年の敦煌市には，3.08 万人の国際観光客と 27.3 万人の国内観光客が訪れていた[4]。総じて，酒泉市観光は粛州区でなく敦煌市を軸として発展してきた。粛州区の観光事情が好転し始めるのは，95 年に嘉峪関空港が完成してからである。なお，敦煌空港は 82 年夏に運営を始めた。

酒泉市は現在，「25618 旅游開発工程」という観光開発計画を実行している。2 は二つの観光中心都市である東部の粛州区と西部の敦煌市，5 はシルクロードを主題とした酒泉市内の五つの観光ルート，6 は六つの観光をめぐる文化主題，18 は重点的に観光開発を試みる観光地を示している[5]。五つの観光ルートのうち二つは粛州区発で三つは敦煌発，18 重点観光地のうち三ヶ所が粛州区で五ヶ所が敦煌市に属する。つまるところ，酒泉市は粛州区と敦煌を域内観光の拠点かつ起点として，観光イメージを作り上げ，観光資源や観光地の開発を重点的に行おうとしている。具体的な観光開発に際しては，数々のインセンティブのもと広く国内に投資を求めるが，酒泉市も毎年 100 万元の財源を確保し，酒泉市所属の各県市区も毎年 30 万元から 50 万元の観光発展資金を確保している。

酒泉市の『十一五旅游経済発展計画』によると，第十一次五ヶ年計画における観光業の発展戦略は，「二つのブランドをつくり，三大市場を開発して，四つの重点を突破し，一つの目標を実現する」とまとめられている[6]。二つのブランドは「敦煌飛天」と「酒泉航天」であり，世界遺産莫高窟を抱える敦煌と「神五」「神六」の発射成功で沸き立つ酒泉を前面に掲げている。三大市場を国際市場・国内市場・周辺旅游市場として，①観光スポットの開発と観光インフラの整備，②宣伝販売促進などでの市場への働きかけの強化，③良好な観光イメージの樹立と観光産業の質の向上，④都市の総合的なサービス機能の向上を四つの重点に掲げている。最後の一つの目標は，観光業を酒泉市経済発展の支柱産業に育成するというものであり，具体的に，2010 年に酒泉市の観光客数を 400 万人回（うち国際観光客 20 万人回），観光総収入を GDP の 11%に相当する 27 億元にまで成長させるとの数値目標も添えられている。

（2）粛州区・嘉峪関の観光開発

既述したように，粛州区観光は嘉峪関観光と一体化しており，不可分の関係にある。粛州区・嘉峪関のみを観光する旅行者も少なく，ほとんどの旅行者は敦煌にも行く。第 2 図に酒泉・嘉峪関近郊の観光スポットの分布を示したが，粛州区も嘉峪関も市街地内部に魅力ある観光資源は少なく，観光客に人気がある著名な観光スポットは空間的に広く分散しており，それらをつなぐ公共交通機関はあまり発達していない。そのため，バスや自動車で分散する観光スポットを効率よく巡る観光形態が一般的である。

---

[3] 酒泉市史志弁公室編『酒泉市志』，蘭州大学出版社，601 頁，1998 年。
[4] 敦煌市志編纂委員会編『敦煌市志』新華出版社，299 頁，1994 年。
[5]「酒泉市人民政府　関于進一歩加快旅游業発展的意見」『酒泉旅游网』(http://www.jqta.com/) より検索して確認した。
[6] 酒泉市旅游局から資料提供いただいた 2006 年 1 月 6 日付けの文献『十一五旅游経済発展計画』より。

少人数や個人で来た観光客も，タクシーをチャーターするか，嘉峪関発の観光周遊バスに乗り込むことが多い。バックパッカーなど長期滞在者のなかにはレンタサイクルを利用する者も少なくない。酒泉・嘉峪関観光は，粛州区か嘉峪関の市街地で 1 泊か 2 泊して，敦煌や蘭州などに抜けるのが，最も一般的な旅程であろう。

第 2 図のなかで観光客が必ず訪問するのは，万里の長城の構成物として世界文化遺産に登録されている嘉峪関関城であろう。嘉峪関関城は現在，映画のセットのように綺麗に修復されている。その一方で，嘉峪関遺跡の外周部分には倣古集市・民俗村・西部風情園，更には植物園・水上楽園などが建設されていて，全体としては，嘉峪関遺跡を核心とした歴史文化テーマパークに娯楽施設が付随するような不思議な空間が形成されている。嘉峪関内には嘉峪関長城博物館があるが，これは 89 年 10 月に嘉峪関市街地に建設されたものが 98 年に嘉峪関内に移転してきた。展示のテーマは『中華之魂』であり，嘉峪関遺跡とともに愛国主義教育基地に指定されている。06 年 9 月からは，毎朝 10 時と夕方 4 時に嘉峪関にて「倣古出関」というイベントが，観光客に向けに無料で行われている。

嘉峪関市街地から西北 8km ほどにある懸壁長城は，明朝嘉靖年間に建設が始まったとされるが，その城壁は原形がわからないほど崩れ落ちていた。崩れた城壁の一部は 87 年に嘉峪関市政府が，嘉峪関へと伸びる南側の城壁は，農民の楊永福が 01 年に私財を投じて修復再建した。彼は愛国者としてメディアに紹介され英雄視されている。嘉峪関市街地から西南に約 7km の北大河北岸に万里長城第一墩がある。明朝嘉靖 18（1539）年に建設が始まったこの遺跡は，万里の長城の最西端の烽火台である。北大河の絶壁の上に烽火台跡が残り，その傍らに記念碑が建てられている。烽火台近くの地下には土産物屋・休憩所・展望台などが入る観光施設が建設され，そこから北大河南岸へと一挙に滑り降りる野猿状の有料アトラクションがつくられている。北大河の河岸段丘面には「倣古兵営」がつくられている。ジャッキー・チェン主演の映画『The Myth』の一部は万里長城第一墩近くで撮影された。懸壁長城も万里長城第一墩も，史跡や遺構というよりも，それらを核とした観光アトラクションあるいは娯楽施設となっている。

嘉峪関市街地の東から粛州区の西にかけての地域には，魏晋期（220－419 年）の壁画墳墓群が 1,400 余りあると推定されており，「世界最大の地下画廊」と地元は誇っている。72 年から発掘が始まった魏晋壁画墓群は，嘉峪関市街地の東北約 20km にあり，6 号・7 号墓が整備され一般公開されている。嘉峪関から粛州区へ向かう途上にある丁家閘古墓も一連の墳墓群のひとつであり，両市街地の空間的な相互作用を強化するという観点から，観光地として育成すべく近年投資が集中している。丁家閘古墓の 5 号壁画墓は，気候が良く観光客の多い 5 月から 10 月にかけて一般公開されている。墳墓内の壁画は保存状態も良く素晴らしいが，墳墓へ降りる道も墳墓内部も狭いため，数名での参観が限界であり，過度に観光客を受け入れるならば，墳墓内の環境が変わり壁画が劣化する可能性が極めて高い。持続可能な発展という観点からも慎重に取り扱うべき観光資源である。

丁家閘 5 号壁画墓に隣接して酒泉博物館が 04 年に建設されている。酒泉博物館は粛州区市街地の東大街沿いに 78 年に建設されたが，粛州区市街地の再開発と丁家閘 5 号

壁画墓の観光開発の一環として新設された。新博物館は 2,600 万元の投資で建設され既に 2 年余り経過しているが，一般観光客向けの展示公開はまだ始まっていない。建設計画では建物のほか人造湖などが建造される予定であり，更に 3,800 万元の投資が募られている[7]。丁家閘 5 号壁画墓の隣接地域に博物館を誘致して観光開発しようとの試みであるが，厳しい自然環境のなか充分とは言い難い設備の維持・管理も加わり，完成した博物館の建物自体が既に老朽化しつつある。

粛州区市街地の西南約 20km にある文殊山石窟群（写真 1）は，01 年に全国重点文物保護単位に指定されていて，粛州区市街地からアプローチする観光スポットである。最盛期 360 余りの建造物が文殊山一帯にあったというが，現在はその遺構と石窟群が急斜面に残る。文物保護の対象が石窟群であり遺構でないこともあってか，遺構を遺構のまま保存するのではなく，遺構の上に寺院や仏塔が続々と再建されている。石窟群周辺には，チベット族やモンゴル族の意匠を凝らした農家楽が並ぶが，国内外の観光客を積極的に受け入れる雰囲気は伺えない。加えて，石窟群とそのなかの壁画の保存状態は極めて悪く，文革期の破壊のみならず，観光客の落書きや剥ぎ取りで文化財の傷みは激しい。建造物の再建で遺構としての価値を捨てた現在，石窟群と壁画の保全がこの観光スポットの生命線である。観光客のモラルの向上を促すと同時に，実質的な保護計画が早急に策定され徹底的に実施されるべきであろう。

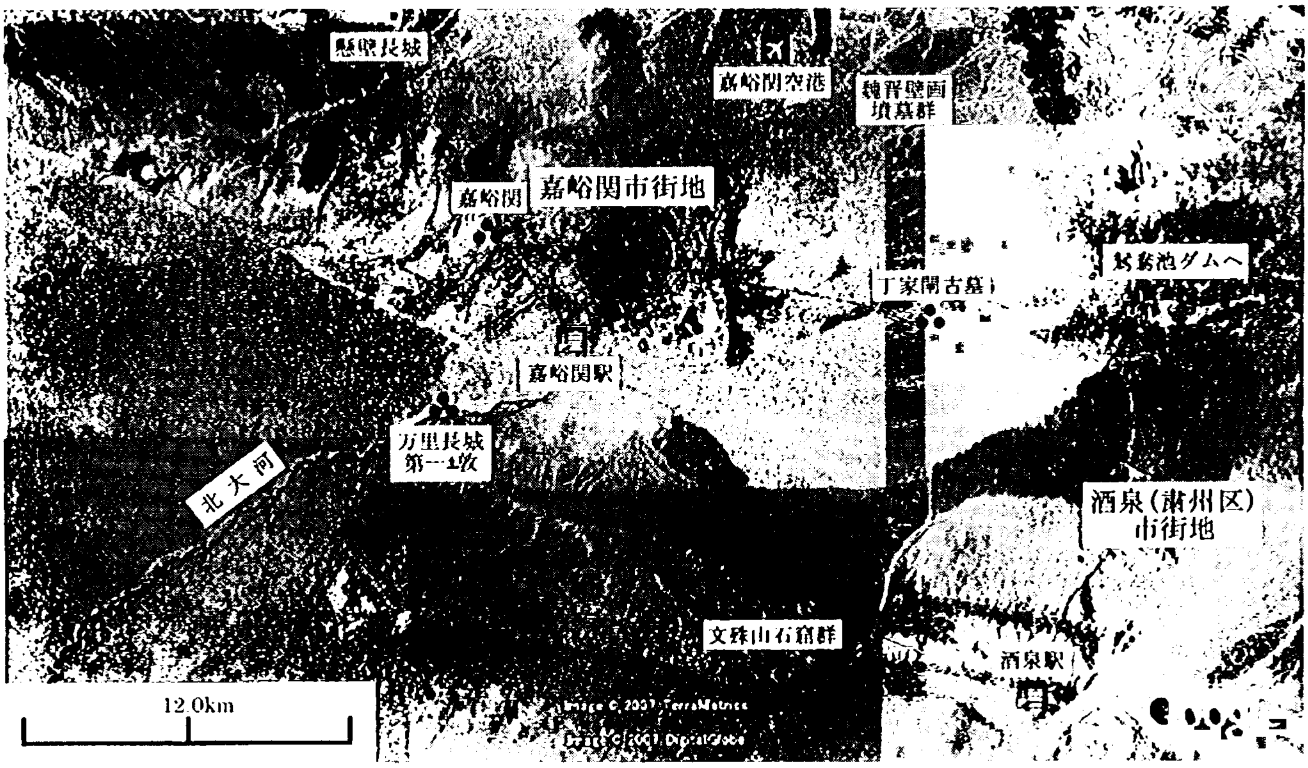
（3）粛州区市街地の観光事情

粛州区は街そのものに歴史の蓄積を感じさせる魅力が弱く，オアシス都市や歴史文化名城という存在をスペクタクル化するのに適した観光資源や文化財も，市街地内には少ない。粛州区は 07 年に「全国優秀旅游都市」となったが，それを目標に累計で 1 億元近い観光投資を行ってきた。総じて，観光資源そのものの魅力が弱い粛州区の観光開発では，スペクタクル化するだけではまだ脆弱なので，娯楽機能なども付与して集客力の強化を図る方向にある。

第 3 図に示したように，粛州区市街地の中心は鐘鼓楼（A：写真 2）であり，そこから東西南北に広幅員道路がのびる。鐘鼓楼の東北には老朽化が著しいインナーシティがあるが，06 年夏の調査時点で再開発にかかり撤去作業が進んでいた（横線部分）。鐘鼓楼から東大街を東へ歩くと，その両側には再開発された商業施設が立ち並ぶ（縦線部分）。セットバックがかかり新築された東大街両側の建造物は，倣古開発方式で西漢代の街並みを意識した意匠となっている。一連の倣古型都市再開発はその更に東側にある酒泉公園の観光開発と無関係ではない。酒泉公園（B）は西漢酒泉勝蹟という史跡として整備され，国家旅游局から 02 年に 4A 評価を授かる観光スポットになっている。チケット窓口の職員の話によると，1 年で 30 万人回くらいの入園者があるとのことであったが，入園料 5 元の公園内は閑散としていた。酒泉公園内部は歴史文化区・山湖風景区・休憩娯楽区・野生動物鑑賞区に分けて設計されているが，錆付いて動きそうもない遊具が点在する休憩娯楽区は廃墟のような印象を受けた。

---

[7] 『人民网』（http://gs.people.com.cn/GB/channel158/1070/1072/200601/13/40456.html）より。



第2図　酒泉・嘉峪関近郊の観光スポットの分布

注）Google Earthで検索した画像を原図として筆者が作成した。

第3図 粛州区市街地の観光スポットの分布

注）Google Earthで検索した画像を原図として筆者が作成した。

夜光杯の製造過程が見学でき展示販売スペースもある酒泉夜光杯廠（C）は，団体観光客がバスで乗りつける観光スポットである。鐘鼓楼の西南に城門（D）や城壁跡（E）がわずかに残存しているが，訪れる観光客はほとんどなく整備もされていない。北大

河南岸の北部公園(F)には，モンゴル族のゲル風のレストランなどが点在しているが，酒泉公園と同様，観光客は少なかった。北大河北岸の金玉苑（G）という農家楽は，酒泉の観光マップで，飲食・娯楽・宿泊・休憩などが一体となった施設であると宣伝されていたが，客どころか従業員の気配すらない廃業状態であった。粛州区市街地から鴛鴦湖へ向かう途上にも，何軒かの大規模な農家楽が存在したが，開店休業状態か廃業状態のものばかりであった。酒泉公園（B）の北側（斜線部分）に10数軒立ち並ぶ農家楽は，市街地住民のお手軽なレストランとして利用されていた。市街地に近接するレストラン的農家楽は存続していけそうであるが，規模が大きく娯楽機能も付加しているようなところは，ほとんどが厳しい経営状態のように見受けられた。

北大河北岸の大法幢寺（H）は，粛州区市街地から移転されてきたものであり，95年に建設が始まり99年に落成した。現在も寺内の各所で工事が進行中で，例えば，臥佛殿の建物はほぼ完成しているものの，そのなかに入る予定の巨大な横臥仏像は，中国で最大のものとなるはずであるがまだできていない。大法幢寺の門前では廟会も行えるよう，宿泊施設やレストラン街を備えた空間形成が計画されている。大法幢寺に信仰の場としての寺院という趣はなく，最初から観光スポットとして創造しようという意図が如実に伺え，広く投資が募られている[8]。

3．敦煌市の観光事情

（1）敦煌市観光の概観

敦煌市は河西回廊の最西端に位置する面積3.12万平方m，周辺農村部も含めて総人口18万くらいの小さな都市である。内陸部に位置するため季節ごとで寒暖の差が激しく，1月の平均気温は－9℃，7月の平均気温は25℃くらいになる。敦煌観光は季候の変動と連動し，4月1日から10月31日までが観光繁忙期，11月1日から3月31日までが観光閑散期と分けられている。域内の観光スポットもこの繁忙期と閑散期に対応して営業を行い，閑散期には観光スポットの入場料を値下げするなど，様々な優待策で集客力のアップを目指している。例えば，莫高窟の入場料は繁忙期が160元，閑散期は半額の80元である。しかしながら，厳しい自然環境のなか，敦煌観光の季節性を緩和するには限界がある。

『2005年敦煌市国民経済和社会発展統計公報』によると，05年の敦煌市の観光統計は，内外からの観光客数が100.2万人回，そのうち国際観光客が7.9万人回，残りの92.3万人回は国内観光客で，観光総収入は3.9億元に達した。同じ06年公報によると，総観光客数120.1万人回，うち国際観光客10.4万人回，国内観光客109.7万人回，観光総収入は7.0億元と大幅に増加している[9]。06年の観光総収入は対GDP比で8.2%を占め，第三次産業の15.4%を占めるまでになった。国際観光都市敦煌にしては，観光総収入の対GDP比・第三次産業比が小さいとの印象は拭えないが，近年の急速な観光客数の右肩上がりの増加を背景に，敦煌市では強気な観光開発と投資誘致が行われている。

---

[8] 『人民网』(http://gs.people.com.cn/GB/channel158/1070/1072/200601/13/40449.html) より。

[9] 05年・06年ともに『敦煌市政務网』(http://www.dunhuang.gov.cn/) で検索して確認した。

中国西北地区で国際観光客からの知名度も高く魅力もある観光地は，世界遺産を抱える陝西省西安と甘粛省敦煌であろう。国内観光客の観光の動機や関心は多様であるが，長距離移動を伴い旅程も制約される国際観光客の場合，やはりこの両都市が空のゲートウェイとなり，両都市を拠点として周辺地域を面的に巡る観光が主流となる。つまるところ，敦煌の場合，空からのアクセスは極めて重要である。近年，敦煌への交通アクセスは大幅に改善された。80年代から運営してきた敦煌空港は老朽化が著しかったが，05年に敦煌市が3.2億元を投資して，大型機も楽々と離着陸できる空港へと変貌を遂げた。敦煌空港の設備拡充により，中国各地の大都市からの直行便が大幅に増え，香港・台湾・日本・東南アジアからの直行便誘致にも力を注いでいる。敦煌空港の改造は，国家民航局の計画枠内で更なる拡充が約束されている。

一方で，敦煌への鉄道でのアクセスは極めて不便であり，河西回廊から新疆のシルクロードを周遊するような観光客にとって，敦煌行きは少しためらわれるものであった。敦煌の最寄り駅は隣接する安西県の柳園鎮站であったが，ここは敦煌市街地より約130kmも離れており，バスで4時間ほどかかった。しかしながら06年夏，念願の敦煌鉄道が正式に開通し，敦煌の市街地から約10km，敦煌空港からも2kmほどのところに，敦煌駅が設置された（第4図参照)。仮設駅舎での営業開始であったが，新駅周辺には貨物倉庫・宿泊飲食施設・商業交易施設などが建設される予定であり，敦煌市商務局が1億元の投資を募っている[10]。道路網も新疆・チベット・青海などとつながり，域内の道路総延長が延びただけでなく，道路舗装や幅員拡張などの整備も進んだため，自動車による高速移動ができるようになった。

観光スポットが嘉峪関・粛州区エリアよりも更に広域に点在する敦煌観光の場合，バスや自動車による移動が不可欠なので，道路網の改善は極めて大きな意味を持つ。日本や欧米で販売されているシルクロードツアーは，敦煌で2泊するのが主流であり，敦煌観光の後は新疆のトルファンか陝西省の西安に抜ける旅程が多い。敦煌で2泊といっても，1泊目は夕方から夜にかけて到着して，敦煌の市街地で夕食を食べて宿泊するだけのことが多い。敦煌観光で実質的に費やされる時間は1日半くらいである。中国の国内ツアーでも旅程に大きな違いはない。1日半の敦煌滞在のうち，最初の1日は玉門関・陽関など敦煌西部の長城遺跡を見て回り，沙漠景観で認知度の高い鳴沙山・月牙泉と市街地を楽しむ（第4図参照)。翌日の半日は，次の目的地への移動開始時間が許す限りで，世界文化遺産の莫高窟（写真3）をゆっくり観光するという観光行動が一般的である。

（2）敦煌郊外の観光スポット

敦煌郊外の観光スポットのなかで，とりわけ日本人にとって興味深いのは，市街地の西郊約15kmにある「倣宋古城」であろう。筆者は以前，現代中国の観光と関わる都市空間の変容を論じるなかで，「(地表に刻み込まれた歴史文化の）痕跡を核として，「幻想あるいは物語」をよりわかり易く見せるよう，可視化しスペクタクル化する営為」，「都市空間の歴史文化テーマパーク化といった現象」が急速に展開していると論

---

[10] 「敦煌火車站開発区建設」『敦煌政務网』(http://www.dunhuang.gov.cn/) より検索した。

じた[11]。こうした営為や現象が発見され正当化される重要なきっかけとなったのが，倣宋古城の建設とその後の観光地化にあると筆者は考えている。倣宋古城は日本で88年6月に封切られた角川映画『敦煌』の撮影に使用されたセットである。井上靖の原作を映画化したこの作品は，80年に放映されたNHKシリーズ『シルクロード—絲綢之路—』の人気を背景に，日中友好ムードが絶頂期に達するなか，数々の映画賞を獲得するとともに圧倒的な興行成績を残した。

建築面積1.27万平方mの映画セットは，日本側の約4億円の出資で87年3月に着工され7月に竣工，映画撮影が終了した同年10月に敦煌市へ寄贈された。日本におけるシルクロードブームと映画『敦煌』の大ヒットで，倣宋古城は日本人観光客にとって欠かせない観光スポットとなった。倣宋古城ではその後も国内のドラマや映画のロケ地となり，「敦煌電影城」として敦煌イメージの形成に大きな役割を果たす。80年代後半でこのような場所は倣宋古城以外に見当たらず，中国各地でその後にできる映画ロケ観光地の先駆け的存在であることに間違いない。場所イメージの形成と国際観光振興との相互作用を現代中国に気付かせた点でも，倣宋古城の意義は大きい。

文化観光のなかでも古代遺跡をめぐる場合，遺跡が色褪せれば色褪せるほど，観光者にはそれらを鑑賞する素養と豊かな歴史的想像力が要求される。マスツーリズムではそのような要求は容易に満たされず，むしろ色褪せた遺跡を可視化してスペクタクル化する方向へと進む傾向が強い。倣宋古城の経験から，敦煌ではそのような手法が，特に受け入れられ易い環境にあるのかもしれない。万里の長城遺跡の陽関でも，広範囲に点在する陽関遺跡の入り口に，陽関博物館が漢代の意匠を凝らした倣古建築で建てられ，その周囲に漢代の砦や武器などが再現され立ち並んでいる。時間に追われる観光客のなかには，遺跡そのものを見ることなく，博物館とその周辺だけを見て帰る人も少なくない。

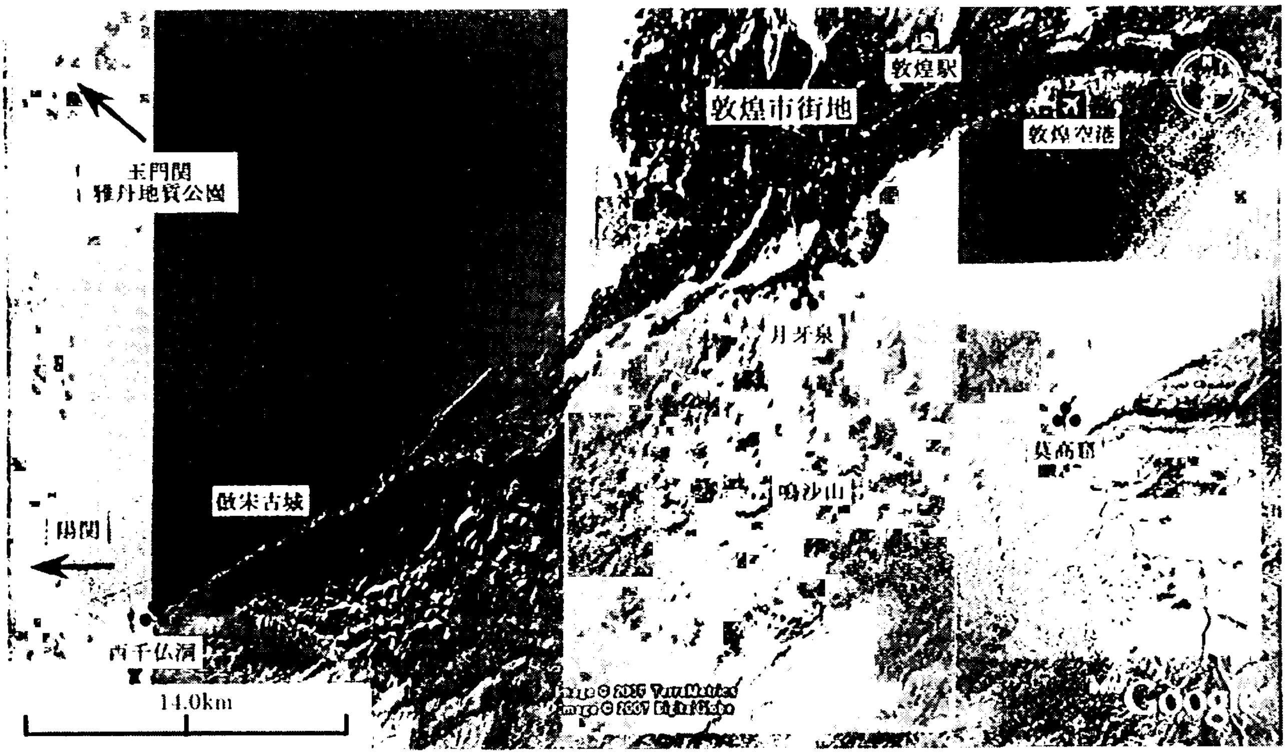
鳴沙山・月牙泉でも国内観光客の「沙漠の緑洲（オアシス）」イメージに合わせて，ラクダに乗っての移動が商品化されており，軽く100頭は超えるラクダが風景名勝区の内側で待機している。この国家レベルの風景名勝区の内側では，多彩な娯楽活動が観光客に悉く有料で提供されている。例えば，入り口から月牙泉までの往復の観覧車が10元，ラクダ騎乗なら30元から80元，ソリやスキーで鳴沙山の斜面を滑り降りるアトラクションが10元，射的場やパラグライダーで飛ぶアトラクションもある。沙漠を駆け巡りたい観光客向けに，バギー（50元から300元）や四輪駆動のジープ（150元から500元）が貸し出され，鳴沙山を横切って莫高窟まで抜けるルートも整備されている（写真4）。ちなみに入場料は80元であるが，日傘・望遠鏡・靴覆いも有料で貸し出されている。

中国の風景名勝区は保護だけでなく観光目的の利用も認めているが，これほど娯楽的要素が強く拝金主義的な雰囲気のところは珍しい。月牙泉は風景名勝区というよりも，沙漠を利用したアトラクション空間のようになっていて，観光客もまさにそのように利用している。雇用面や財政収入で地元経済には貢献しているとはいえ，月牙泉

---

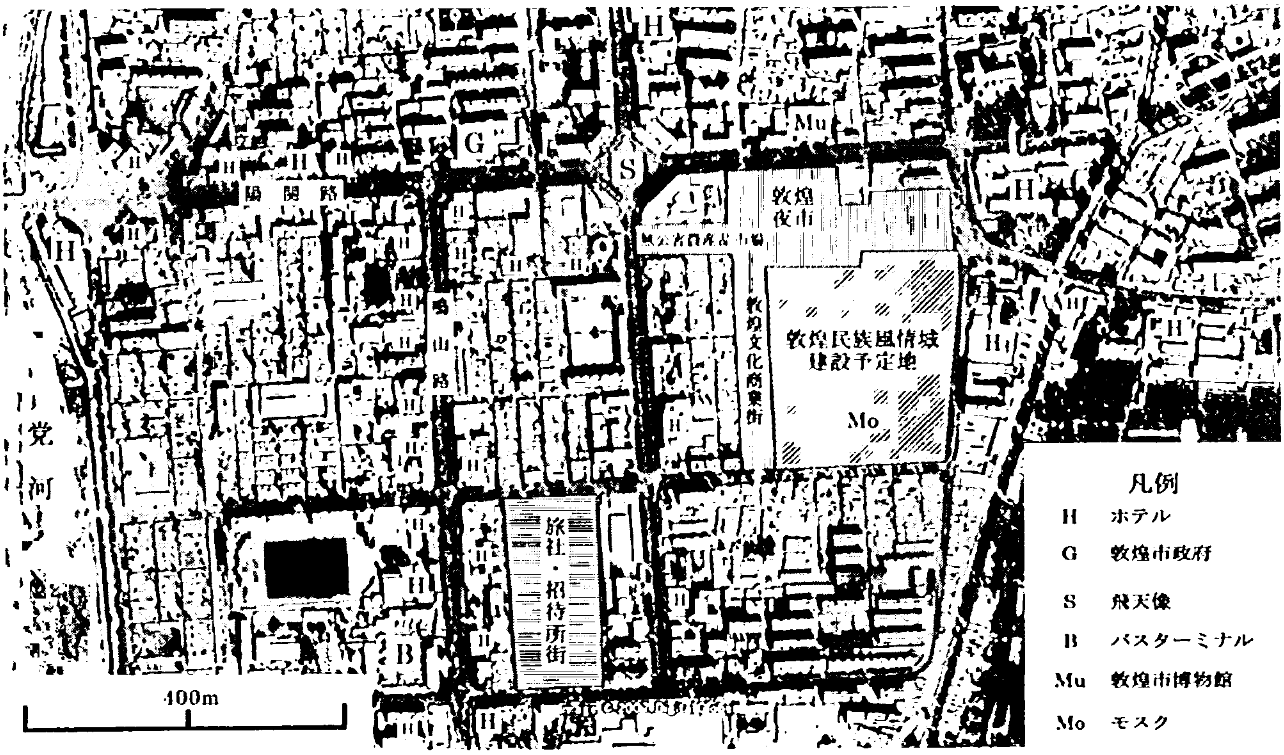
[11] 松村嘉久「歴史文化テーマパーク化する都市—古都・西安の観光開発と空間変容—」（石原潤・趙 榮・秋山元秀・小島泰雄編『西安市と陝西農村の変貌』奈良大学文学部地理学科，2006年，66−84頁）。

の水位が低下する傾向にあるなど，その持続的利用が危ぶまれるなかで，観光資源としての管理方法を再考すべき時に来ているのかもしれない。



第4図 敦煌近郊の観光スポットの分布

注）Google Earthで検索した画像を原図として筆者が作成した。



第5図 敦煌市街地の観光をめぐる現状

注）Google Earthで検索した画像を原図として筆者が作成した。

一方で対照的に，莫高窟では厳しい文物管理が行われている。莫高窟の核心部である文物保護区域内には，土産物屋ほか余計な施設は一切立地させていない。保護区域の外側に，ホテル・土産物屋・郵便局・公園・資料館などが計画的に配置されている。入場料を払って中へ入る際には，手荷物を預ける決まりになっている。これは観光客が文物を傷つけるのを防止するという効果も狙っている。莫高窟内は必ず十数名から20数名程度の集団に1名の案内人がつき，洞窟を説明しながら回る。中国語は当然のことながら，英語・日本語などでも案内している。案内は第一に文物への理解を深めることが目的であるが，観光客による文物破壊を防止する効果も期待されている。洞窟を巡る歩道や階段が整備され，洞窟のある壁面も侵食防止の施工がなされ強化され，持続的な観光資源の活用に向けた保全も手厚く行われている。

80年代半ばに莫高窟を訪ねた旅行者は，扉の無い洞窟を自由に見て回り，自由に写真を撮影していた。現在では，案内人が洞窟の鍵を持ち歩き，案内人の誘導のもと決められた洞窟を回り，写真撮影は基本的に許されない。壁画の写真撮影を希望する場合は，文物管理事務所に申し込まなければならず，専門の職員が付いて回り1ショット100元でライトアップしてくれる。莫高窟は世界文化遺産に登録されてから，観光開発よりも文物保護を重視する計画のもと，海外からの協力も得て文物の管理方法が大幅に見直され，厳しい管理のもと大量の観光客を受け入れている。ちなみに，莫高窟の入場者数は06年で55万人回を突破した。

莫高窟よりも規模や質量は落ちるが，国家重点文物保護単位である西千佛洞の洞窟壁画も，重要な観光資源のひとつである。西千佛洞でも遊歩道や階段が整備され，侵食防止施工も行われ，保護区域内の整備は進んでいる。しかしながら，保護区域に隣接する絶壁に新たな洞窟を開削して，新たな壁画を書いた石窟群を建設し，観光客に提供する観光開発計画が策定されている。『敦煌現代石窟芸術工程建設項目』と名付けられたこの計画は，800万元の投資が2年で回収できるとして出資が募られている[12]。中国の投資回収のサイクルは，日本的な感覚からすると信じ難いくらい早いが，長い時間をかけて建てられた貴重な文化財の近くに，数年で投資回収できる施設を建設しても，おそらく瞬く間に劣悪な観光ストックになるであろう。

（3）敦煌市街地の観光開発

敦煌の市街地は党河の東西両岸に広がる。歴史的に古いのは党河西岸であるが，一部で城壁跡や白馬塔などの歴史的な遺跡が残るものの，市街地自体に歴史的な趣は感じられない。市街地の中心は党河東岸であり，観光客の敦煌市街地での行動はほぼ第5図に示した範囲で収まる。敦煌市街地の中心は飛天像があるロータリー（S）であり，星付きのホテル（H）は陽関路と鳴山路に多く立地する。敦煌市政府（G）や敦煌市博物館（Mu）も陽関路沿いにある。鳴山路南部の西側には敦煌バスターミナル（B）があり，鳴山路を越えた東側に1泊数元くらいから泊まれる低層の旅社・招待所が30軒余り立地する（横線部分）。国際観光客や余裕のある国内観光客は第5図に示したホテ

---

[12] 「敦煌現代石窟芸術工程建設項目」『新華网甘粛頻道』（http://www.gs.xinhuanet.com/）より検索した。

ル（H）に宿泊するが，安くあげようとする国内観光客に混じり，いわゆる「外来人口」や出稼ぎ労働者が，旅社・招待所街に一時的に滞在する傾向が強い。観光都市敦煌が成長する過程の初期において，旅社・招待所街は重要な役割を果たしたが，今では敦煌市政府を悩ませる地域となり，近い将来，一帯が撤去され都市再開発にかかるであろうと地元の人々は予測している。

敦煌市街地は歴史的な核心が希薄なありふれた都市空間なので，観光という文脈のなかで都市空間のスペクタクル化を伴う都市改造が，西部開発の資金流入を受けて今まさに本格化しようとしている。陽関路や鳴山路など観光客の多い街路は，電線が地下に埋没され，街灯や舗装路面も漢唐時代の意匠で凝らされている。敦煌を代表する観光資源は莫高窟であり，それを象徴するイメージは飛天であるため，街中随所に飛天モチーフの塑像や壁絵などが配置されている。先に，敦煌を訪れる観光客は夕方に到着して，翌日と翌々日に郊外を周遊して敦煌を離れる観光行動が一般的であると述べた。敦煌市政府は，そのような観光行動を強く意識して，日が暮れてから深夜にかけて観光客を楽しませる観光開発戦略で臨んできた。そのひとつが「夜景灯光工程」と呼ばれるもので，観光繁忙期の夜間，290 万元の投資で市街地の代表的な建造物 24 ヶ所をライトアップしている。06 年から敦煌では十大景観工程が総投資 3.8 億元かけて実施され，都市のインフラ整備と並行して，都市景観の美化と観光施設の建設が始まった。

夜の敦煌市街地で最も観光客からの人気を博しているのは，飛天像のロータリーの東南に広がる敦煌沙州市場であろう（第 5 図の縦線部分）。91 年に総投資 3 千万元で漢唐の頃の風格を意識して建設された沙州市場は，03 年の国家旅游局の観光プロモーション「中国民俗風情游」で，甘粛省を代表する観光スポットとして推奨され，近年では「中国交易市場四星級市場」の称号を獲得している。面積 6 千平方 m 弱の広い敷地は，敦煌夜市・敦煌文化商業街・無公害農産品市場の三つに大きく分かれている。無公害農産品市場は文字通り無公害の農産品が販売される自由市場である。敦煌文化商業街は骨董・文物レプリカ・観光土産などを販売する商店が立ち並び，夜間は車両の出入りが禁止され歩行者天国となって出店もでる。なかでも最も観光客からの人気を集めているのが敦煌夜市（写真 5）であり，敦煌夜市から敦煌文化商業街へ，あるいはその逆方向への観光客の導線ができあがっている。

敦煌夜市は軽食スナックを提供するレストラン街とビアガーデン風の空間から成り立っている。レストラン街は常設であるが，観光閑散期の冬場は営業していないところが多い。ビアガーデン風の空間は，テーブル 1 台と椅子 6 脚の 1 区画に細切れにされ，4 月 15 日から 10 月 15 日までの 6 ヶ月間で 1 区画が 3,000 元で賃貸契約される。全体で 30 余りの区画の借り手は，レストラン街で販売されている料理に自分の利益を上乗せしたメニューを用意して，そのメニューを掲げて客引きする。メニューは中国語表記だけで外国語表記はないが，代表的な料理には写真がついている。借り手で外国語を理解する者はほとんどおらず，中国語を解さない外国人旅行者には写真付きのメニューで対応している。客が座り注文を受けると，その料理を提供するレストランに注文をつなぎ，上乗せした差額が利益となる。敦煌夜市はレストラン街も含め，一時に二，三百名くらいは優に利用できる。

借り手は1名の男性を除いて女性ばかりで，一種のパーティコンパニオンのような役割を果たしている。メニューの値段は横並びで同じなので，容姿端麗で愛想の良さそうな借り手が人気であった。借り手は，地元敦煌や酒泉市の人はほとんどおらず，広く甘粛省や新疆から来ている。個々人の能力や商才にもよるが，繁盛すれば半年の契約期間で，賃貸料金3,000元の軽く4倍を超える利益があがるとのことであった。ビアガーデン空間には数組の流しがいて，酔客からのリクエストに1曲10元という決して安くない値段で応じるが，次から次へとリクエストが入っていた。数名の流しに出身地を尋ねたが，全て安徽省出身であった。ビアガーデン空間の借り手も含めて，敦煌夜市はいわゆる出稼ぎ労働者の受け入れ先になっている。

敦煌夜市の南側一帯の広大な敷地が，清真寺（モスク）をぽつりと残して撤去にかかっている（斜線部分）。ここは先述した十大景観工程のひとつで，敦煌市街地の観光開発の核心でもある「敦煌民族風情城」の建設予定地である。あちこちに張り出されていた撤去公告によると，撤去人は敦煌市市場建設服務中心，撤去評価機構は敦煌市価格事務所，撤去監督単位は敦煌市城市建設撤去弁公室となっていた。撤去公告は06年4月20日付けで張り出され，撤去期間は4月20日から7月20日までの三ヶ月間とされていた。筆者が訪問した06年9月初旬，既に撤去は完遂されていた。撤去にかかったモスク周辺は清代の古民家が数軒残り，新市街地のなかでは古い街並みの一角であった。

敦煌民族風情城の事業主体は敦煌市政府であり，三つの広場・四つのテーマ街・八つの特色区を建設する計画を立て，1.5億元余りの投資が募られている[13]。敦煌民族風情城はシルクロードのオアシス都市敦煌のイメージを最大限に活かして，文化展示・娯楽活動・地方色に富む飲食・観光土産物や観光芸術品の販売などが一体となった巨大な総合観光サービス施設になる予定である。隣接する既存の沙州市場も同じような施設であり，両者が競合することは容易に想像できる。沙州市場は建設されてから既に15年余り過ぎ，投資は充分回収できたであろうから，新たに敦煌民族風情城の建設計画を進めて沙州市場を潰すのではないか，という憶測が市場内の人々から聞かれた。都市空間の新陳代謝を促し，場所のイメージやスペクタクル化を強化するため，土地収用が容易に行える中国では，行政側が積極的な観光開発に乗り出すことが多いが，敦煌民族風情城はその典型例であろう。

4．おわりにかえて

粛州区・嘉峪関・敦煌のいずれの市街地も，シルクロードやオアシスを想起させる観光資源にいまひとつ乏しく，歴史的な蓄積も都市としての魅力も弱い。それゆえに，粛州区では倣古開発や観光資源に娯楽機能を付加することで，敦煌では観光客の夜の過ごし方に焦点を当て，都市空間が再編されスペクタクル化されつつあった。国内観光の成長が順調なことを背景として，観光投資を誘致し易いこともあり，観光客のまなざしを意識した都市空間の再編が急展開している。この流れは止まりそうもないが，

[13] 2006年9月30日付けの「敦煌風情城一期建設項目招商公告」（http://www.gs.xinhuanet.com/dfpd/2006-09/30/content_8176755.htm）より。

無謀と思える投資も多く，互いに競合しあうような観光開発も散見されるため，再編された都市空間が断片化されたモザイクのようになる危険性もはらんでいる。また，観光開発とも絡み，市街地の一等地で行政が開発事業主体となり，広範囲に及ぶ土地収用が行われている。従来通りの強引な土地収用手法は，中国国民の権利意識が強まるなか，近い将来，確実に下からの批判や抵抗にさらされるであろう。

甘粛省の観光資源は長城や石窟などの古い遺跡や遺構が多いため，歴史的想像力を喚起するスペクタクル化が顕著であり，地理的想像力を喚起する観光イベントが行われることも多い。文化観光の対象となる観光資源に娯楽的要素が強く付加され，観光地としての魅力の強化が図られている事例も少なくなかった。国内観光ブームが益々盛り上がる様相を呈するなか，この流れも止まりそうにないが，過度な娯楽機能の追及は観光資源そのものを劣化させかねないので，慎重に臨むべきであろう。一方で，国内観光も成熟するにつれ，観光資源に対する向き合い方も多様化することが予想される。自然環境の厳しい甘粛省では，「遊ぶ」・「楽しむ」といった要素だけでなく，「学ぶ」・「活動する」といった要素の強化も必要であろう。

写真 1　文殊山石窟群

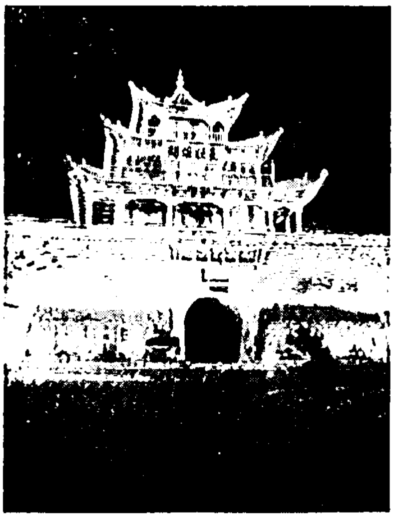


写真 2　粛州区の鐘鼓楼

写真 3　敦煌莫高窟

写真 4　月牙泉の娯楽機能

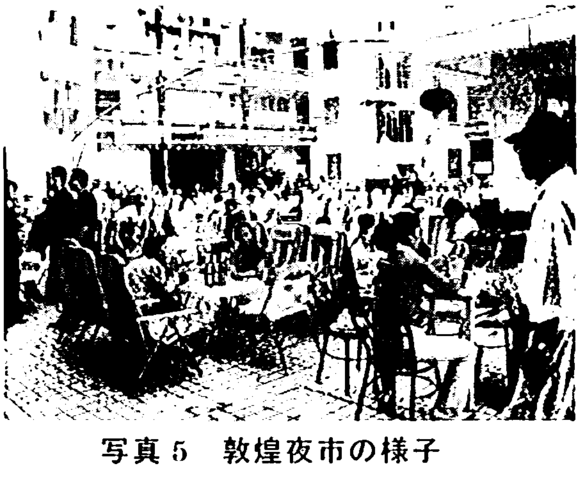


写真 5　敦煌夜市の様子